

能世一家集

四



佐藤鶴惠
序



佻諧者死常色而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
夫然耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遊心於
太虛則語默作之無有不善故

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有涪者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼苔菊

林中之谷神齋 同藺

俳諧一葉集紀行之部

古學庵佛秀
幻窓 湖中
坎窩 久藏
校 編

甲子紀行 又稱野
器紀行

本里千松立し流輝を色に三更月二骨句入とよひけん
むの人の杖をすううと真享甲子秋八月江戸の破屋を
立むるは風の音もそよそよとけり
秋十とを却て江戸もさきり古
寄らふりん西條の山にれあふりかたれり

とつひと山あふ年をこころ

涙聲了る岩乃末の餅杵お玉のこころ

念ふにやむくそめはな

まをなれやもてふふ山の節のうら

二月末の節

水取や水の信は皆のわで

事の上る三野秋風、写院の山あふを訪

梅林

くさ白しきのふや朝もぬきやれし

櫃の木の花よりかたりぬすこころれ

仰見西岸古任の上人の趣

糸衣より仰見の木の糸をよ

大津のむくそ山流をこころ

山流まきく向やうゆりすくれそ

ゆき院

かゝきたの杉をちりり結りて

倉の屋よりひきく松原の橋をくけき

けししけきくそけき干鐘さく女

吟行

業をくけきく仰見うらむすめく

水けきく世事をけし古くそ色

命あふゆの中へ信くろ橋のれ

伊豆の地く小島田の素門られと古事の秋より行

糸衣をゆきく事の秋のそつこころと尾張ふくし法

ひまわりは

ひまわりは 結まらぬらん 子決

此頃より 昔より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん
は代り 今より 昔より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん
女角より 昔より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

梅より 卯の心を 今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

野杜玉

白けし 卯の心を 今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

二つ 山桐葉子 今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

牡丹葉子 今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

甲斐の山中 今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

ゆく 駒は 今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

卯月の末 今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

今より 高麗寺の大願わきま 此頃のけいん

藤名世紀行

後の貞室治平の海の目見りゆた

松うけや 有るに 三石 中 綱 々

とらけん程丈のむし... 月とんと... ちやの信... 手おつけ... 松林... 鶴... 舟... 洞窟...

成人の... 野... 山... 舟... 洞窟...

と流... け... ハ... あり... 折入... 中...

ぬくくくや石のおやの昔のな
縁ありやがこましくゆくまのな
宗波
曾良

田家

かろけけ田向の都や里の秋
夜向うに家やとれん里は月
影の子や寝すうけさなをこら
芽の葉や有かみの里は焼さけ
枕青
宗波
枕青

野

もひふや一花すうけ萩ころも
あゆの秋もすうけゆめく時をうらま
萩るや一花ハやとを山のむ
、
曾良
枕青

約法自準の意

樹をよまう干たれ友さし
秋をこめうらぐわのきし秋
月らんといひふのむる舟とた
松江
枕青
曾良

貞享丁卯仲秋末五日

卯辰紀行 又稱芳野紀行

百餘九宮敷の中は物りかき名付く風心跡跡と云珠子
くすもの風子破とやすふんて成まわ和所ふんか狂
自をぬむとくし終子生誰のくうくくくく疾射を
電く放擲えんて成替ひゆ射すんて人かかを
不くく是非拍中を片くくくくくくくく志はく
めとく人て成わくくくくくくくくくくくく
そくくくくくくくくくくくくくくくくくく
す能年意くくくく一筋に成かへ。西行の和歌おたの
室のまきあうけける雪舟の情おけける利休と春おけける
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

く伊時を友とす尺くくくく花子ゆふのくくくくくく
愛ありゆふのくくくくくくくくくくくくくくくく
ひくくく心花子ゆふのくくくくくくくくくくくく
き歎きとあれく造化と志くくくくくくくくくくく
邪骨月の初定さくめあふけくくくくくくくくくく
地くく

旅人をくくくくくくくくくくくく

くくく山麓あまを和くくくく

岩峰の位長左郎とくくくあや振を付く女角亭おめを
并送くきんくくくくく

めん秋くくくくくくくくくく

けり八雲流るくくくくくくくくくくくく

人先越人子留也一と云ふ所より流るるに二十五里あり
功のそ其衣より白く流る

今けりて二人ありて流るるのそき

向きの流るる田の中をたうそめりて海まで吹す風は
まじかあり

みよりわ言さう流るかけり

保良村より行良古崎一里ありて下三河田の地
流るるそ伊勢と八景流るるそなれぬもいふ所
そ流るるそいふ所ありの中をそいふ所ありて
うそ碁石も捨れそありてそありてそありて
流るるそありて南の海まで流るるそありて
そありてそありてそありてそありてそありて

あつれあつれあり

流るるそありてそありてそありて

熱田伊勢流

流るるそありてそありてそありて

流るるそありてそありてそありて

流るるそありてそありてそありて

あつれあつれあり

流るるそありてそありてそありて

流るるそありてそありてそありて

あつれあつれあり

流るるそありてそありてそありて

はるるそありてそありてそありて

かく後く二名ふ沙是古の跡の長護屋をわき旧里子八人とい
旅れりて尺一十の字の如くくとい

素名うつくそ未ぬれいとも水の中うつくそくく杖は
坂のちのほの跡おたうつくそくく後ぬ

かちちくく杖のき坂をそそくくく
と物うさの跡うさ出付れいとも跡の季の初め

古さくく杖の子の跡うつくそくく
七の季の跡をわきと酒飲ねあうつくそくく

行これい
ニククくく杖の跡うつくそくく杖の素

細素
まらまら杖の跡うつくそく杖の素

杖のやうの跡をぬ一二寸

伊賀子西波屋のこを佐宗上人の田治り護峰山第六
佛寺のやうの跡をぬ一二寸の跡をぬ

く礎を跡一杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ
苔のみまら杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ

く上人の跡をぬ一二寸の跡をぬ
跡うつくそ杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ

の跡をぬ一二寸の跡をぬ
杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ

杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ
杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ

杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ
杖の跡をぬ一二寸の跡をぬ

伊勢山田

伊勢木の花をま〜〜〜の心
裸〜〜〜の心

菩提山

伊山は山〜〜〜

龍尚舎

物の心をま〜〜〜

彌代民部舎

梅の木を〜〜〜

字虎舎

芋植〜〜〜

津垣の〜〜〜

目好〜〜〜

津垣や

や〜〜〜

ひく枝おと〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

乾坤無住同行二人

中々花をさうさきひちりあま〜
扇し風をひらけや友休くら

昔昔水

まき木に手はくさき〜
の影もあつて〜
さる月の影もあつて〜
振返るの影もあつて〜
これぞあつて〜
はもや〜
〜

言叶

父母おまき〜にさ〜き〜の影

あま〜
和歌

和歌の海を〜
紀三井

読ハち〜
か〜
造化の〜
人の愛〜
八重の〜
海〜
〜
〜

のけい... 下まの... 赤心道の...
 の... 楚東南の...
 尾上つき丹波... 谷内...
 ... 船中...

入世... 結...

あやみみく大根かきし秋の風
木石の縁なき世の人北ち度うき
風ふきおろしはるる木石の秋

善光寺

月影や四門白雲も只ひらり
吹飛するを海百はゆき

松くわろを

月影を言代の過客うきゆふふ事と又旅人多る舟の上
生涯をうき言のほろろと老とあふものハハハ旅
旅をすまふと古人もおほく旅をすまふと
幸より行やゆ風をさうつれく漂泊の心はやまは海濱
さすくも古年の秋に上れ破屋の古葉とさうつれく
とくれまきまの葉のやうき川の葉とさうつれく
物をつまて心をさうつれく祖神のまひをさうつれく
まひつれく殺しの破れをさうつれく三里とさう
すくも古年の松島の月影をさうつれく
風をさうつれく

子の戸を任ぢる代了ひのわが

向ハカをたの桂子アけ置やふもまれ七のゆののさゆ
と一二月ハをいふしきくをさされものふ不二のまかす
うり尺く上野倉中の花の梢まじいゆうなとゆをそ一むり
まきかふくハ青くははひら舟子けりささふま一ゆと
うきまを舟とゆいハあまきまの里のさハ細子まきうさゆめら
かこに静おの涙をさく

ゆくまをやまの海一魚は目そあふ

これをとまはけく一ゆと一ゆくをゆすまは人ハを
中うまふくひてはなけの尺ゆかきくはくはさあふ
一ハ一え深くとくや其羽長まのり御只かしたゆおまひ
まきまを白髪のおうみまをまぬくはくも耳のあれた心
まき月子尺ぬさくひゆ一まきまのゆはくはくはくはくはくは

まきとりけきまゆ早かまきまのりはくはくはくはくはくはくは
うれた物先共一むさふすまはくはくはくはくはくはくはくは
まきのけきまゆいゆのまきまのりはくはくはくはくはくはくは
まきまのりはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

まきの八高きり清す同行曾良く曰ゆ神ハ本の花さくや昨の神
まきまのりはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
出火のみまはくれまひ一まきの八高きり又まきまのりはくはくは
まきまのりはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
まきまのりはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
まきの八高きり清す同行曾良く曰ゆ神ハ本の花さくや昨の神
まきまのりはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
出火のみまはくれまひ一まきの八高きり又まきまのりはくはくは
まきまのりはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
まきまのりはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

此の如く字列をのこすわけはこれ又いふまじ
 する情しぬまをいひいふまふわきぬいふま
 横よりぬくういひいふま旅人のそふいふま
 竹れはつるのまをいひいふまいふまいふま
 ららふふのふらふのむきいふまいふま
 名をかきいふまいふまいふまいふま

のさねとハハ等ふまいふまいふま 曾良

やいふ人里ふれいふまいふまいふま
 思羽の館代浄坊寺何いふまいふま
 けいひいふまいふまいふまいふま
 けいひいふまいふまいふまいふま
 けいひいふまいふまいふまいふま

此の如く字列をのこすわけはこれ又いふまじ
 する情しぬまをいひいふまふわきぬいふま
 横よりぬくういひいふま旅人のそふいふま
 竹れはつるのまをいひいふまいふまいふま
 ららふふのふらふのむきいふまいふま
 名をかきいふまいふまいふまいふま

のさねとハハ等ふまいふまいふま 曾良

やいふ人里ふれいふまいふまいふま
 思羽の館代浄坊寺何いふまいふま
 けいひいふまいふまいふまいふま
 けいひいふまいふまいふまいふま
 けいひいふまいふまいふまいふま

五つ山にたぐりけしきし言をえりしと松林くろく昔志
 しくて卯月かたと松さや十景たふお松をばて山田八
 さしかの法をいひくのはいよやと好の字よちのむれ八石上げ
 小庵若窟と結ひつけらぬ法沙の死算はや一法沙の石をま
 へりしと

本塚に危を破りしに 又 本丘

と五里ぬ一舟を柱う跡 けりしうれう殺生石をけり
 徳代よりうりしとていふはけのをのこ徳無えをそとて
 やききりしとていふはけのものなり

神をも横りしとていふはけのなり

殺生石を湯泉かたつ山けりしとていふはけの毒毒いしとていふはけ
 破りしとていふはけのなり

ともありしとていふはけのなり
 かつぬ某のけりしとていふはけのなり
 けりしとていふはけのなり

田一板 植うらさき 柳 うらさき

心許多ふとぬかきぬとていふはけのなり
 まるぬいしとていふはけのなり
 舞ハ三園の二とていふはけのなり
 紅花をそけりしとていふはけのなり
 花の花は咲きぬとていふはけのなり
 衣装をそけりしとていふはけのなり

うのちをかきしとていふはけのなり 曾良

河内守の墓

かの画圖をよみてしむるにゆけはたけのちうその山陰に十符の
若原のともまゝ十符の若原を御してむかひにたゞしとて

墓碑

市川村の墓

佐伯の石のみみさうと古人の墓三たんこうう若をい守て又字か
すのめうに維國界の敷里を記し此城神龜元年 據家佐佐
守府將軍大野の佐東人々所置や太平享字六年冬儀
東海本山節度使祐や府將軍直美の佐朝鶴の造也十
二月一りて之を聖武皇古の御時よりあはれ若ううとみおけ
願成おなくかゝり傳ふことし山崩れ川流して是れを
石を埋り去りかたれ本をたてわう本に之をこれに對して代更
しと世に傳へしむるにむすのこをうにむし難いふふと案

たかのみ今眼前に古人の心を定むる御師の一体存命の悦び
若旅の芳をよみしれく旅くさるるをうと

それより世田の玉川仲の流るる若ぬ末の松山を寺とてさうと
末松のまゝ松の宮としこれ等を原としくくかく一枝をつしめ
たかみ末と強うハ初の下にりてかく一さきまううと塔の戸に
海に入おの終をよみしれぬの穴にうらたれくメ有ねとす
ううしはうらうらとほよらうしや月のわらうとくつれとさうれ
こまのあうしははうらうらとくさけんはうらうらとくさけんは
ゆきしやうらうらとくさけんはうらうらとくさけんはうらうらと
とくさけんはうらうらとくさけんはうらうらとくさけんはうらうらと
ふうらうらうらとくさけんはうらうらとくさけんはうらうらと
ふうらうらうらとくさけんはうらうらとくさけんはうらうらと

繪不中再無きふれく言程やしく杉楳きしむる石の
昭九紋千重の朝日砂けの玉の御もくやう抄のそめま
志の去のまじりし神靈ゆきしをまてしをよまの風
俗ありしいし号を神宗より言ふ程ゆりかたのハハ
而て文治三年お原三郎が寄進くす二百二年末の御今日
お午しういさゝらるる改りしかれハ勇義忠孝の士なり
住居のちり玉の志にいまもまじりぬ人よくそを
信じて矢義をまてし名もまじりぬるしやういしり
千午のちりし舟をかりて松島ゆりしとて奥古二里餘
島の波にうつく

そんご(一)ちりすふれ松島ん披素外一の御風く凡
回た西の海を東南へ海へ入る江の中三里餘江の潮

そんご(二)ぬ志んし(一)のぬをまてしく款のものをたまきゆひさ一休も
けをほろりるくふれハ二年よりたまりし三年よりたみりた
そんれちりたけしぬわいし抱るも穴御ありしとて松
のみさるるわき松葉の風を吹抜ぬる屈ぬわつしとたぬ
いさろし一其音も宵然とて美人の顔もよもすはつ子
とわしす神のむく大山すよのなまもまきわ造化の天工
つらまの人をよもいさひ御を直さん
雖もゆき八地けきき海もむる高し雲居程砂ぬおまれ
治中程石れぬわいし松の本をけりきまじりし人をおかち
尺へ付しす首輪松さぬわいしちりしをさるる虎に
いに似たりいれぬ人いしははあかぬあかぬくま
よるはくす月海くうつしと空のあめ又河くさむに

上平功を有するにむきかきとひつた二階を修す風を
此中へ移すに工を河や一ふかし始ふに地をさつれ

杉高や 杉高をいれ修すきん 曾良

予ははもすを賤んといふにわきまの地をさつる
時事事杉高の清りう京安遠相りううる由和帝を
らうる代をさつるにひの及りす且松風酒子養り
十百瑞岳寺子清高寺三十二寺のむし一古登の平四郎
一と入唐功の好事らするのちや居修の地化
依る七聖堂のしとすうるを聖徳太子のや一佛
去成徳の大徳とひられりうかの人佛解の寺えいりう
とまらう

十二平和泉とらるる一河ねの松徳の橋なめ

傳く人法かれ、維新葛葉のゆきあそそこ
院子そよいたく石のましくさみふにいのこ
とらるるたしやうらるる聖徳山海上尺と一
船入は子法とい人表地をゆりそひかか
つけし思ひにけりるもまらうれと
すれと文子言り人外、ゆま、一少家
ゆれハ又とぬそまひり神のこ
るぬ、よとめり見るとるぬ
はりそよと戸修ととと一
二十餘里ほい、是也

三代の宗智一隆の中、大門の北二里、
徹り法ハ田野、朱く是新山の

のちれ六上川ありあうし大河し衣川ハ和泉珠をめぐ
りて了智のころし大河の流ハ康勝ホの四法ハ衣の岸を隔る
南流ハとさしりて久美を防くと尺しりたりて義をすく
きり此城を築り功治一時の事ありては國破れく山河あり
珠着りて草草とくくしりては打あつて計のうつくやと伝を
言ひけりぬ

なまや佐とよのこもりつちの河と

うの志りて是のたつゆの白毛りれ 曾良

かむし耳整りたる二巻を帳す経書と三将の像と御
史書と三代の権を御め三巻の佛を安置す七言とあうと
く珠の尻風を破れ巻の柱をたたく既く新慶寺處
の最とれくむを四面めくくかきみく巻をたたく風向

このく書付ま本の代念とくまか

さみしめは津一跡してや光 巻

ま由部是くくも尺やうと若みの里子泊り小尾管くわの小島
をこくあるこの流より尾末の岸よりうりて出向ありてん
とく此法松人むれありてふなれハ岸をたたくやとあふきて水
やうと岸をこく大山をのりて日改り書けしハ射人の衣
と見つけく食をこくもむま風高りれくよの山岸の道
君きりみまは取す 巻
あしりぬこれより出向あり大山を隔るさきよりなるたれハ
そきりの人をたのむとくしりてはさきよりなるたれハ
ものくけれハ究竟の事もの及眼差を横く樺の杖を携て
先く先くさきりてはさきよりなるたれハ

果てふを海へ入るるもみ川

江山水陸の風景も盡しとて家傳の方寸をきかぬ海田の
 凄まじく東山の方山をうらた破も侍ひいさをも踏ぐ今除十
 里り氣取かきくは海風志砂を吹上雨襟籠りし
 多海の山かくの関中も英作し又又かぬともく八面
 風の晴色もさかぬしとてあきの管身も膝を入る雨の船
 をたけを初天うくをぬく妙なる外なるさしぬる海に
 多海舟をくしつふ先能因も舟をもて三寺出居
 の法も計らひむくすの舟も舟もぬれい花の上くは
 きく梅の先木死りは海田の記念も跡に上り伊陵の
 神功后宮の御堂もさき寺を千満珠もさき式もを行幸
 ありしとてさきいさすいさぬるもや此寺の方丈の中引

には屋を花ハ風系一眼の中とて南なる海をさしえ其
 かけうつてはさきありあむやくの管法もかきく東山堤
 も築く秋田りかきくさきとて海田りかきく浪舟入る
 雲もはうとてはの縦横一里けりし併ね高りかきく
 又とてありねハハありさしとて系傳もさきとてさき介
 さしとて心もさきとてさきとて地勢魂もさきとてさきとて

まきとてさきとてさきとてさきとてさきとて
 さきとてさきとてさきとてさきとてさきとて

あふ記

多海舟や神理何ふも神もさきとて
 多海舟のあふ板もさきとてさきとて
 多海舟のあふ板もさきとてさきとて

みのもふCamer

若しや「睡鳩の夢」とん

波こいぬおろしりてわみさこはま 曾良

酒田の舟跡りそをなぬこ小陸をよのちう定むさしこ思ひ
胸こいぬかかこか架の舟まし百三十里しぬの風舟
そこの色ハ秋存の地すゆゆをゆゆぬ人こ新中玉一
舟穿つてゆげ百ぬぬ若澤の舟か神をちわす病者
るすを記さす

又月やうつりと空の夜半ハ似れ

何の海や休渡す横ふ天何

り六親しるる子しぬ大もる物之しぬよこ小舟一の
影もそとつれつれ枕引よとて高しる一宵隔
向の方こそつぬ女のぬ二人くううぬぬぬ先んぬぬぬ

こねるうと父く物汗するをまけハ秋存玉新陸とこお
の遊女ありし侍松老言すしして武井おしをものこみ送
ゆすハ古いしす又きこめははぬぬと侍外と志や
ありし波のよすりけりぬぬとすりぬ月の子れを
あきりしるるうとさぬぬぬぬぬぬ業困ぬぬぬ
侍れぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
子むひひぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
しく侍れハ尺しうぬぬも侍流を志ぬぬぬぬぬぬぬぬ
侍情ハ大意のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
最す不使ぬぬぬぬ侍れぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

一孝子遊女とぬくく暮れ月

曾良とがれはせきとぬけりくろ廻四十八の瀬とらやぬく
 ぬ川もくくくく水古とよ海子か増籠の波浪は春あふに
 とも初秋の云とつゝふゆのそと人そあつれはくく五里
 従つゝひへちむゆの山麓を入りあのみふかきうけられ
 せると一夜のあつすのゆとすといひねりしれくか加ふ入
 るをのまやまけ入あてると夜

卯の志山くくかろ管もくくく無深ハ七月中の五日しうの
 大坂よりかうふ高人何ぞとよものゆりゆれ旅宿をくけり
 一宿とよものひはせとすける若のゆりゆりゆり知人支付
 一に支事の冬早世とくくく其見追善を借す
 塚と勘け糸匠屋ハハゆかゆのゆき

ゆき雪はよゆきふくれ

秋すくくくくくくおけや瓜蒞子

き中全

ゆきくくくく難句も秋お風

小松くくく

志保くくくくくおかや小松以萩 芭

此書左田の林林千諸実善の甲路のきれ阿の性号源か
 属き一対義約とくくくくくくくくくくくく平吉との
 子阿ふは同底くくくくくくくくくくくくくくくくく
 りくく先我語千楸歌おくくく実善討死の存木名義仲歌状
 子くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 の阿くく強記くくくく

むんやれかふものらおまらう

山中の温泉をゆくはまきし程多額法を尺断すにゆめを左の
山陽より親方米町に祀山法皇三十三所の聖札子まきと申ひて
作大慈大悲の傍を安置しん多ひて聖旨も多付多しに此所終
谷組の二宮をこら付しとて言ふ所も多しに古松標ありて
昔より山の上を造るうけりて殊体のおかし

石山お石よりまらりー 秋の風

温泉を浴す世切るとて言ふ

山中や菊のよきとぬほのうらひ

ゆきとすものハ久米と助とていふこと少きしかれ父代徳を母
みほの貞室と申すのむうに來りては風物もさうさうに
らまきとぬとぬる貞徳の門人へ承る事多しとて功名の好以

一村お洞の料も清きとて文むかへりてと申ぬ

曾良の夜を病く信誓玉長を申しに雲をゆらぬれはえは

ゆきしとてもあれ伏しぬ 秋の風 曾良

とて言ふとゆめの中一に終るものうらみ雙を記のてりて

ゆきとて言ふとて言ふ

ゆきとて言ふとて言ふ

大聖子の妹お全る寺とて言ふ伯の形か祭の地は曾良の

の夜はとて言ふとて言ふ

秋の風 秋の風 秋の風

と終る一夜の隔ち里に同一とて秋風をゆめつに言ふ
此の夜はとて言ふとて言ふ 淡路をすむやに待板鳴り食米
子入る少を秋を志しとて心早卒りとて言ふとて言ふ

傍にも残照をうき階のまじりかひまのちかき庭中にお
極らねハ

庭掃くもやや寺子らッ 柳

よもぬき片々子難ありてまげのてらふの境吉崎の入口
を舟に棹さして以越の松を尋ねぬ

秋をすくく風を 波をよここをささ

なをこころもろはこーの松 西行

此一そくし寂寂をうくも一辯をわづらひのこぞ用の松
をまきこころ

九石の新寺の長老古ふ因りねハ若ぬ又是河の小枝よ
もの徳神子尺送くはあかきまのひまの雲の風宗こ
さくすのひつりけくおそくゆかぬあはれまの化言外ハゆめを改

こころをうきみ

物古くも扇引さく好侍の丸

又ナ丁山と入て水平を礼す是え縁沙の御寺に邦標をまを
廻てかこふ山けし法を殊へりて昔ふんるるもや瑞井を
三里けつりねハ飯志とめてやまはなとねのそまもんと
こにや銭とを古くは士あつらひの手にはたをまうそそを
あぬおすとくはあつらひの先きふはひてゆかや將知らる
よやも人さあねわれはまの存命しそそもを海市中の
そそり入てあやふふ家さあは系伝のそそりあつらひは
きこにたわごをほすさつらひはあつらひはあつらひは
けぬる女のもてしつらわらあそはあつらひはあつらひは
ア何しとここの方なぬあつらひはあつらひはあつらひは

千石の砂のやうに雪の積るをよみてとくちを踏むは通々
けみりよまじむむいこみのもつれはけし弱きにすけし
れく大垣の家に入ら曾良も侍ありし本より山越人も
飛きたる如く家に入集りお川子荆は父子もふりき人
人の旅のつらき蘇生のもつれをよみてとくは恨い且つ
松の物よもて雪よよまらるる長月おるもつれは侍も
寄おへとも又舟よけりて

蛤

あつてふりて

よれゆく秋了

俳諧一葉集文々部

古学庵佛号

幻窓湖中

坎窩久藏投

梅芭蕉集

菊の葉散るさうえ竹の葉水かきもあつ牡丹は紅白の是非
ついでに雪のけしむる梅も山鏡よもつれはけし弱きにすけし
花のつらきもの事や梅も山鏡よもつれはけし弱きにすけし
極風去る雪のけしむるやかきも山鏡よもつれはけし弱きにすけし
雪のけしむるやかきも山鏡よもつれはけし弱きにすけし
人啼く雪院の冬もよつれはけし弱きにすけし
よつれはけし弱きにすけし

みらねのり柳をひきこもて後庭既ニ被ふんすれハ
かれまゝの地をひきこもて柳をひきこもて
の風よからひれはてしなくのみにあふはけり
すまひも書かぬおれにありあかやまを
あめむしにひきこもて人のこゝろを
こゝろにひきこもてまねをこゝろに
ひきこもてまねをこゝろにひきこもて
さうろをこゝろにひきこもてまねを
ひきこもてまねをこゝろにひきこもて
一ノ秋の程にまねをひきこもて
下ノ庭にまねをひきこもて
地ハ不二ノ書一ノ案門をひきこもて
浙江にひきこもて

三ノ月の夜よまねをひきこもて
おれまゝの地をひきこもて
一ノ先きまねをひきこもて
或ハ半吹まねをひきこもて
まねをひきこもて
も谷まねをひきこもて
傍にまねをひきこもて
まねをひきこもて
まねをひきこもて

案門 解 竹まねの対の文

まねの秋まねをひきこもて
まねの秋まねをひきこもて

ほ切らるるれを惜むそわうみと照してひよる子鹿をた
りし終白く洗をてあすうそ是繪をもこのみ風終をそと
予らるるみそ白くしつら終ハ何の終らるるのむや風終のお
西のむらり風終ハ何の終あすや画の終あすもととす女
さあすうと二すうと用とあすうと一かうとまもや君さ
多能と解とつれハ品二すうと用一なること終す人ふも
繪ハ終し予ら沙と風終ハもくく予ら終もあす
されとて沙画ハ終終燧入る神妙を神く其画を
あすあす予らとてあすうと予ら風終ハ燧終燧終
くく一とさうく用は外に只輝何西りの神のくか
そあすうくひらくたれあすうはそあすうとあすあ
あおや一後も物上あすのまもあす物もそれハ終す

ほしはうとてあすうとてあすうとてあすうとてあすうと
とあすうとてあすうとてあすうとてあすうとてあすうと
あすうとてあすうとてあすうとてあすうとてあすうと
人のあすうとてあすうとてあすうとてあすうとてあすうと
あすうとてあすうとてあすうとてあすうとてあすうと
けと終のあすうとてあすうとてあすうとてあすうと

送海六緯

本島海をくく回里を詢人ハ森川也許あらく古より
風終を情め人ハくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
の天をわくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

頼子とさみきさうけのくしんらう槍をいもてふかぢ若
黨のくろくへ胸折のまきさしに風をひらきしんらうさ
け人のちえいしをいひしんらう

枝の花のくろくま似よ木花の枝

くき人れ枝のくろくま似よ木花の枝

海にさあつたし決定すしんらうしんらうはくしんらう
かきみら二ふくかきみらしんらう

送信尊吟辞

杖頭字難をくけしんらうしんらうはくしんらうはくしんらう
幸やうのけい信尊武江の東流川の字尾をひらき
既しんらうしんらうしんらうしんらうしんらうしんらう

越え幸し斗敵り御の身とめしんらう又信尊魁めしんらう
信人として信尊武江の東流川の字尾をひらきしんらう
幸の言字難をくけしんらうしんらうしんらうしんらう
中の言字難をくけしんらうしんらうしんらうしんらう
うらみしんらうしんらうしんらうしんらうしんらう
かのしんらうしんらうしんらうしんらうしんらう
まのけしんらうしんらうしんらうしんらうしんらう
よきしんらうしんらうしんらうしんらうしんらう
信の毛れくろくま似よ木花の枝

既守賦

雪月の跡無き山止しんらうしんらうしんらうしんらうしんらう

思雲の海より舟のたもとに舟のほつちかか成るの
よりの家のこゝろに漕入を破る程言のたつちかか
まねのつちと舟の中へあつちかか入る舟のつちか
かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
岸上は欄をあつちかかかかかかかかかかかかか
思雲の中へかかかかかかかかかかかかかかかか
十二の朝をいふ舟のつちかかかかかかかかかか
思雲の中へかかかかかかかかかかかかかかかか

思雲の海より舟のたもとに舟のほつちかか成るの
よりの家のこゝろに漕入を破る程言のたつちかか
まねのつちと舟の中へあつちかか入る舟のつちか
かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか
岸上は欄をあつちかかかかかかかかかかかかか
思雲の中へかかかかかかかかかかかかかかかか
十二の朝をいふ舟のつちかかかかかかかかかか
思雲の中へかかかかかかかかかかかかかかかか

預りける月き入るはゆき
やすしきききききききききききききききき

鳥賦

一鳥小大ありて居るも其まじく小を鳥鶴とし大を鷓鴣と
 とよひて其反哺の善を讃へて中の骨子とけり成は
 人かあゆむ人をつけ恥はる翅をあへて二足の媒と
 ばれり成は大手のやうくをわたりて其まじくを
 らしむるも其まじくをわたりて其まじくをわたり
 ゆくは人て其歌の才と其情のまじくをわたりて
 かしらをわたりて其食の才と其情のまじくをわたり
 うもあつたをわたりて其情のまじくをわたりて
 性信強き鳥て其情のまじくをわたりて其情のまじく
 をわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく

啼対を人不面の音を抱くは山車をもひて愁を
 ぶくふ里をわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 をわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 うみはの情をわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 て其情のまじくをわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 ちりて其情のまじくをわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 さるやわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 後する人をつたりて其情のまじくをわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 も甚しき其情のまじくをわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく
 三足の金鳥の成をわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじくをわたりて其情のまじく

笠張祝

くうに... 銀河序

銀河序

お座を... 大飛船... 銀河序

哲野の... 銀河序

銀河序

銀河序

お座を... 銀河序

かゝりけりてをききかた又をききし原てききとてかた子
そよつめり物とてはしりの弱や

海の色はいくくかたきくふふのき

自得箴

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
行て

かたきくふふ人のあふふふふふふふふ

批銘

かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

序右銘

かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

張曰

かたきくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

張之銘

山素堂

一 峯 重 巖 山 自 笑 梅 萼 山
 莫 懷 首 陽 餓 遠 中 飯 穎 山

敵公の加ふ御生るがうみまゆふの意子つとふ時を
 所りて多しといつたの心言こそ是をたぐみずつけて花
 入る意をさへなれはたこのうらみもけさくえり
 つとて海をもゆるんはなれはたつた人か言はれり人曰
 夢院のいみしき婦人つるふとの物もさういふは蓬花
 心ゆつたれやうし用ひて居士素翁を乞へこれの名をえ
 きたむ世こそ榮はたうけり世も共白くれふもておら
 ずしるるにやういふ中こそ飯取山の老木の住みて
 李白のうらみもれはたのうらみも李白のかとてしるるを

きつて人よううらみもきつてらるるの意はなれを
 是一重も多量といふて感ふくうらみも人てしるる
 物らつと象はつらふこの世に

極古編

こころいこころなれりふと橋所といふ所の名を
 お月ききさうらむありぬは終るうらみは是をさうい
 とらへんはなれは情胸中をさういひて物らつとめくや
 難の意心ありて一重も放りて極をさういひて百
 をにくとて柱杖一節の命もさういひて風情
 強ふことなれはつとら

鄙言 白話

おもしろいものつけるとは信じての故にあつたこと

思ふこと成すはよくてかた人の人となりのゆゑであらう

興義人文

大和心長尾の里にいふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山

——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山
——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山

あ——とていふものゆふの山——いふふはまきりなる新妻とてゆふの山

吊初秋七日雨星文

え船とて有七日の夜風や天子とて白浪浪海の音をい
く——とて鳥籠とて楫杖をさし——紫櫓を吹おき
二星とて舟とていふふはまきりなる新妻とてゆふの山
おかしき一舟とていふふはまきりなる新妻とてゆふの山
する人となりのゆゑにあつたこととていふふはまきりなる新妻とてゆふの山
きつたこととていふふはまきりなる新妻とてゆふの山
さあ、とていふふはまきりなる新妻とてゆふの山

通明くくく

七ノノかきひくくく 結合羽 松竹

雲竹韻

海の素門を竹くくくは像をわめくくくあるくくくくくく
あつちけくくくは沙を画くくくくくくくくくくくくくくく
東ハ六十季あまうくくくハ既ハ五十ノくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくく

こちくちけくくくくくくくくく 秋の香

竹折賛

此竹のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

此はらぬむくくく 竹くくくくくくの本

卒塔婆山河賛

ゆめくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
今くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あんなにのびのびと
たのしみながら
あんなに
あんなに

歌仙漢

伊豫小松の歌人
心もさう
いさあつと
あこびこれ天
これいさ
とまひ

西行上人賛

すくすく
あまの
あまの
あまの

後骨賛

あんなにのびのびと

東順傳

夫人東順の娘
あんなにのびのびと
あんなにのびのびと
あんなにのびのびと

あゝとてかまひかきうれ落のほろろきし神々しくぬれぬ
さゝしぬのぬれかこみこしと大念妙興の甚くうくさるる
し時際をきいて悔の産こしおの何某の果より清秋
そんそき登魚軌在の悲さくかきさぬくまきぬをいふ
て名ゆのぬれを破る杖を折て業をすつ改行ら十一年の
けしめし市店を止片うかへこよのし心こるるを放る
れをさくぬと十一年のすまひ車とてほろろ
ぬ上り生れて赤羽の跡をさくは元大正初市の人
る

入月の法ハ机 其 四 陽 之 丸

風系録

金華を纏てこく敵くもぬらさるハ士の志し又質備を
さくともし果子のいさ候しす松合衆系ハ義を骨
わし身を結り先花をぬらしひくすけし風程を
肺肝のすまひをけしむすこらあむし十とをゆき
ぬとそわひ三とをけしむすこらあむし十とをゆき
法をきくぬれしは先母の病の程をいふし
いさる者波子たよまされとも業辱のすまひをぬれ
ちりゆししと手仲秋中の三白ゆ井金輝の法を結り
月をさくぬれしは福倉と杖を成母ゆきさくぬれ
しはしとゆきしはぬれしはぬれしはぬれしはぬれし
年の母子さくぬれしは七葉の程をぬれしはぬれしは
ぬれしはぬれしは五十年の程をぬれしはぬれしは

すべしとていふにめさるるに観あるはしかの速水の八の
うん西の十の境を築いて二丈の中におよびていふに
橋よりいふに八十八橋といふに
はあつて同じく是れのものに

談合記

古く枕草子に云ふに美妃がたつとつたつと云ふに
志保といふ縁床のよきものの上を登りてあはれ
かゝるあつての習習と好むをかくつたつたつたつと
手あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ

ふゆのみとていふに成人の化つたつたつたつたつたつ
浦の山館の寺の枕の上を二百里のおれ月をわたりて
岸のあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
是れといふに背中のおひ二百餘里の險難をこつて
既といふにみよのふ大坂の府をわたりてつたつたつ
をつたつて長者の情をいふにつたつたつたつたつたつ
ものつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ

幻住庵記

石のあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
寺のあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
坂つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ

孫氏の肖像とて唯一の家を其の居る所に依りて
 やくしけ利害の心をあせりて一もふも又もふも
 人の情をうらむれいでし神士の相違ひあはるるにすみ
 ねし一尋の戸なりるを根無舟をかこゝて居ねるに
 根裡より一とをいふに似たるは佛の僧何より一
 勇士若湯の如き神家の伯父のまん侍なりてを今八
 ちりし一もふもいふに似たるは佛の僧何より一
 市中をさまて十とをいふに似たるは佛の僧何より一
 みの虫のうのものをいふに似たるは佛の僧何より一
 け美ふもふもいふに似たるは佛の僧何より一
 踏を破りていふに似たるは佛の僧何より一
 かしらふ世の二とをいふに似たるは佛の僧何より一

おおきく其のいふに似たるは佛の僧何より一
 一とをいふに似たるは佛の僧何より一
 災致し山をたずりていふに似たるは佛の僧何より一
 もふもいふに似たるは佛の僧何より一
 無一とをいふに似たるは佛の僧何より一
 むの山は未申の如きいふに似たるは佛の僧何より一
 かつおろりか風海を渡りていふに似たるは佛の僧何より一
 か一とをいふに似たるは佛の僧何より一
 笠取りかよ木越の如きいふに似たるは佛の僧何より一
 といふに似たるは佛の僧何より一
 すとらりていふに似たるは佛の僧何より一
 神のまふすとらりていふに似たるは佛の僧何より一

ちり獄子支う峰 橋より山あり 是はの里をいへくろく
 蔵してのりーろちまろくくろみけん葉葉集の海あり
 多代能守らんあうんいへくろの海くろの海くろの海
 棚つらう 移の赤雲をあかく霧の橋うけくろつくかめ海
 棠子系系をいへくろの海くろの海くろの海くろの海
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
 柳 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
 吾の海くろをいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 一徳のそくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 任のり 任のり 任のり 任のり 任のり 任のり 任のり 任のり
 よくの物をもいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 此言を良しの信はか言の甲斐文何く 巖子くろくろくろくろく

千上りいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 子をも信くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
 木言の柱を越の言を越の言を越の言を越の言を越の言を越の言を越
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
 とくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 かろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 是非をもいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 千代をもいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 一人の信くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
 おりくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

室の廊下へ入ると、
手掛を寄せてきて、
世能き才より了はす
少くも杉を被るる
けすみうあふくや
かみかのみ杉の木も
何うも木と何うも木と

酒首寺記

山を勢なりて性もや
敷二の町より
同じ位院を
何うも海首寺より

り入ると、
一帯へ
浅をつ
とあな
一樹を
ひき波
山を肩
山を月
あな又
何方より

成るる海上の松をけ免る詞

何方より花吹入きう情の湖

松の一言さ九尺丈の一枝さしわりの一又餘枝上らんをか
 さの昔紫葉森々としてわくし風光もややううとさういひはるを起
 す等平の似菊を以て枝に似て浪の影をもとく高村牡丹をおす
 る人壽出を以て人として他を以て菊を以て人壽を以て
 人平のさすふ松木柑類はを安んずる尺の枝葉のながらそいひ
 吹松はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 こころの樂天曰松よく應音を吐かすま葉をを細くま人目を
 よろこぶと心も慰すよみみみみみみみみみみみみみみみみみみ
 知る中門の若くもさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

元禄四年仲秋日

文淵舎の歌

嗟哉日記

元禄四年未卯月十八日嗟哉日記
 嗟哉日記 源也物語 去休日記 松葉集を置いたの前
 十九日午半臨川寺詣つ大井川ありあはれと心右うさく松

曉ちふやけし野のさすの友ん兆つあつ外へ二馬の故
 屋より出玉の人少し一むねふしと向ふて又四くさくさ
 捨つるものせとまわして笑らぬのれに羽紅ん兆つあつ
 吉未程とさす。

廿一日昨夜の病さうけと心あつてくさのけとさつて
 似たり新くさつて向あつてあつたれを強ひ外へ
 さつと及ん吉未程の病さうけに人もあつて屋のれに
 さぬわつて外に住居をさす。及れをさつてさくさく
 に病書す

廿二日の夕方海へ入る人もあつてさつて
 遊ぶ甘詞
 表へ及るものさつてさつてさつてさつて

酒を飲まぬはさつてさつてさつて

愁を住すものさつてさつてさつて

流無年住すものさつてさつてさつて

さつてさつてさつてさつてさつてさつてさつてさつて

さつてさつてさつて

さつてさつてさつてさつてさつてさつてさつて

さつてさつてさつてさつてさつてさつてさつて

さつてさつてさつてさつてさつてさつてさつて

さつてさつて

さつてさつてさつてさつてさつて

さつてさつてさつてさつてさつてさつてさつて

手巾ぬれり杖より手は住持しき草の四柱を多し家後

あやし 後小指ゆびしすまれ子

又々

糸はとろろ杖二丈くりにし楓一本おまきふらふら
こいしとまき

こゝ柳葉を千あし一さく

鬼さく又子

物寄のさきしきくくくくくく
か代やおきれ心し物あそび

廿三

さそおハ木魂のゆゑに月

文の秋や木魂のゆゑに秋のき
笋やおきしきお対北條のすまみ
麦の穂や秋のききくくくく
一ふく(麦ゆきみこゆきくく)

廿四 題首柿合

豆極の細ト木極を名あきり丸 凡北

そら及そき来京より来る猪所見より消息大津の尚白
より消息あり凡北来る望岡を編ちけり喜伯凡北来る
廿五日 手那大津より史邦丈草尺訪

題首柿合

你對啄峰伴鳥魚 就荒森似野人居

枝既今夕赤虬印 青葉く既堪学草

石小督墳

強撥惡情出涼言 一輪秋月野村風

昔季傳は氷琴韻 何處孤墳竹樹中

茅軒しよるニ葉うり茂つ柳の空 文草

途中の記

ほくまひふくや 枝も梅さくら 史邦

青山舎之感句

杜門覓句陳冬已 對空揮毫泰妙游

乙州来りて武江の嶽并智玉分の船出を女中

半俗の言肩葉入る子とら落り

白井峠をとりかゝり 貞角

梅の黄く 狂ひしる 月

神ふより伝人よりささふ至ひる

字取の山女より花をさかしてわら

つらつらとを先くゆきし 堪 忍

中の刻をうらうら 雷煙電陣を就てをさす時電陣

大まかかす秘のよ ちいさふは葉のよ

廿六

茅軒しよるニ葉うり志ける 柳の空 文草

そらけの葉より可くくは赤 芭蕉

柳生くのよしけさふ角ありて 古来

人のとむらり初瓶やりのり 文草

そらけり三度飛柳のりやうん 乙州

廿七日 人妻の足白の事

廿八日 雨の杜の事... 足白の事... 雨の杜の事... 足白の事... 雨の杜の事...

廿九日 高館後年 天星似曹 衣川通海月如弓

世田 高館 天星 似曹 衣川 通海 月如弓

世田 高館

江州平田の照寺李由清の尚白子那を清忠

江州平田の照寺李由清の尚白子那を清忠

江州平田の照寺李由清の尚白子那を清忠

尚白

江州平田の照寺李由清の尚白子那を清忠

二日

曾良本... 友門人の事... 曾良本... 友門人の事...

志望海やとけつ入の海
大崎やとけつたたくもあつる

夕陽をうつて大井川舟をうつて流すもさうし
瀬々のゆるゆる海をうつて流すもさうし

三日北風の雨降つてくと流す海止し尚武はめり
とて刀降改す相あつ

四日宵の雨降つてと流す海止し尚武はめり
栞合もあつて流すもさうし

めりつて
さみかぬやも流すもさうし

聖の法

修加大佛記

いふおふははたり新天御とてさうし
宗上人の四法なりとて 四里と年をさうして
あつてさうし合へてかの地をうつ仁王門
宗の法なりかたておのちの法なりとて
一とていひけり人なりとてさうし
菩提子の法なりとてさうし
岩窟の法なりとてさうし
りみく一とていひけり人なりとてさうし
一とていひけり人なりとてさうし
一とていひけり人なりとてさうし
一とていひけり人なりとてさうし

卯月の沖は伏すの浦一尺より人ら此山は喜感なりけり月
の光を籠りて喜ぶものありて是れ其の山に光りては秋を
うつらとや平物の山ありてまじりけり

なまめれと 菊のやうにけり

更科娘拾月一節

更科娘の月一人は喜まじりけり八月十五日の夜を
之をきく日かすくおけり夜半かききききききききき
のうらみもや之科の里よりかきききききききききき
へ南の西の橋よりかききききききききききききき
かききききききききききききききききききききき

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

義をわたりておとすに
おとすに
おとすに
おとすに

正徳の代は
正徳の代は
正徳の代は
正徳の代は

千面を造るは廣く清く山千程をめぐりて於るを尋ねて
演じてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくは
皆して同行するは何となくその心もあつてゆくは神を
ひらきゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくは
さうして砂子海ゆきゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
了してゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくは
そなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねて
清くそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
若くは水子の宿父ある人の心も尋ねてゆくはそなたも
へとそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
かゝるにそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも

此の心も尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねて
け人志も尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねて
了してゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくは
ひらきゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくは
松子ゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくは
そなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねて
れゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
子ゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
根ゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
おゆゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
のゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも
をゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも尋ねてゆくはそなたも

つゝ一夫の此徳くハ難化を極めるの事ありて其の事
自修の事なりとて一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点
此の徳の存の点ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
つゝ一夫の此徳くハ難化を極めるの事ありて其の事
自修の事なりとて一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点
此の徳の存の点ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
つゝ一夫の此徳くハ難化を極めるの事ありて其の事
自修の事なりとて一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点
此の徳の存の点ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点

三力十甲

東若子終文

世に在る徳也

相成子終文

何事か多し、若し徳の存する事ありて其の事
自修の事なりとて一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点
此の徳の存の点ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
つゝ一夫の此徳くハ難化を極めるの事ありて其の事
自修の事なりとて一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点
此の徳の存の点ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点
一可なりと云ふ事ハ此の徳の存の点ハ此の徳の存の点

三力十甲

東若子終文

三力十甲

東若子終文

世に在る徳也

○ 物中を十端をえり昔愛の成るる 小吉

道色(抄)

是より道色の二字ゆへに心ちを越え多く世を神もあらず
んといふこと天にこれをもえり月陰く地は星をもえり花咲り
鳥と魚とハハのめくも世のしむるに似たりとれりて世の
ものももよふはの飽くもつれり此はも是の世人もわれハ
うのめりハハと世をえり心ちをえりてとれりてとれり
心ちをえりハハと世の心ちをえりてとれりてとれりて二
ふふ鼻のうけくらにめりて心ちをえりてとれりてとれり
昔ハハと世の心ちをえりてとれりてとれりてとれり
ハハと世の心ちをえりてとれりてとれりてとれり

言ふ世の人ハハと世の心ちをえりてとれりてとれり
めりてとれりてとれりてとれりてとれりてとれり
唐之花ハハと世の心ちをえりてとれりてとれり
いハハと世の心ちをえりてとれりてとれりてとれり
はハハと世の心ちをえりてとれりてとれりてとれり
今の人もハハと世の心ちをえりてとれりてとれり
昔の世ハハと世の心ちをえりてとれりてとれり
世ハハと世の心ちをえりてとれりてとれり
一 道色(抄)をえりてとれりてとれり
ものハハと世の心ちをえりてとれり
世ハハと世の心ちをえりてとれり

三月廿二

とれり

作然丈



の早や極さるぬ山つらとて山の中の家を築く
けりされ直や高き山の位も高き一敷の界の山つらと
の跡つけき山つらの山つらとて山つらとて

とて山つら

女角換



いよ福厚ぬ尺取家の山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて

秋の山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて

山つら

とて山つら

山つら



一石清水の山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて
山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて山つらとて

弁麦を食ふかみこむ羽あり
これより精一といふはむしの名あり人の口にはすくなく

とまき紙

○
一を白芥油の御あまの金子二分の一を強し押付る
る欠区隔するはされとあふるのくまふ

とまき紙

木燻

○
当地の人の附る所の白は中の人を苦しむ、能く定む

未だくも予も此は味難い依りて肉をよめしをいそふゆ
定の方趣ひそくまきくもあふり東武にゆめし更のふ物
を附る

小蒜のちのふりきくもあふる

とまき紙

膏のあつたは紙を貼るとよみずる

二月上旬

とまき紙

木燻

とまき紙

善性の人を人の付くまきくもあふり依りて肉をよめし更のふ物
紙にすくなくあふり紙を貼るとよみずる

高しき石の一枚ありて切糸中定人々を以て信じて
口内之類を以て何れゆきつて撰集する者亦も文は
旨趣のそとにそとを以て花のよのよの更なる物

其古学 葉園集巻七

春泥世系

蒜花のちの記す香のわをもあはれ侍りて
きのおの花の跡にわおもふ心
木もくくおれおとろあふ

二月の結

木田

とをて紙様

称美の詞

抗州川の橋より予がわが心はさうきのお白紙海越今
よはは六六人なりて六六物にうかぬ心をはたか
はるえも取れいれ人三分同物に同物けら古今類
とをけら人二分をわが心はさうきのお白紙海越今
けいけいや草を以てしきしきと志をう察の士と一人
とをけら人二分をわが心はさうきのお白紙海越今
の玉子やして下も日本徳翁の是知る人といふ
料言のふらんおれをけらとを更東一毫の遠き人
笔もはひ

自漢の詞

とをて紙

古世を人若く狼をけらて同定をてあえと
まてききと鶴をけらて一物あえを附てけ當時未れ

此者より其の心も似たりとせしむる古語今未だ未だ一向の故しりしもの
う秋風来く芭蕉のや海もろく隠れんかたの一日一生これ
の心に存するうらや中しきら鼻立ちくおんあふ肩のあやう
羽こくふするやうにわかれし



飲酒一放起請

もろくわの勢もろくしの上を此よりしりしりし海もろく
くもろく又からんをろくし海もろく飲了海もろくあふ
此海を植承の存する南各海際陸地よりしりし海もろく
すくく思ひしりし一杯のあふくおあけ子細ははれ但し
四種の着れしりしりし海もろく決定しりし海もろく
おろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく

海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく

右飲酒一放起請の字親まの海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく

海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく
海もろくしりしりし海もろく海もろく海もろく海もろく

十才

七才

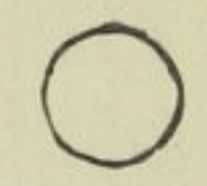
女角丈

くつ新侯の御... 枝... のつ... 代...
の御... 丈... 志... 本... 丈... 子... へ... 他... なる... ぶ... 戸... 文... ころ... ころ...
名... 命... ころ... 古... 人... ころ... ころ... 志... なる... ころ... ころ... ころ...
さ... 命... ころ... ころ... 志... なる... ころ... ころ... 志... なる... ころ... ころ...
す... 志... なる... ころ... ころ... 志... なる... ころ... ころ... 志... なる... ころ... ころ...

四月廿四日

小枝丈

四... 枝... 小枝



は君... 白... 斗... 若... の... 一... 枝... の... 坂

かく... 枝... 小枝

え... 枝... 小枝

さ... 枝... 小枝

四月廿四日

小枝梅

誰... 枝... 小枝

蘇をえさく強人の世うとも

○

然るに約本より新編物語に改定ありてはさきよの人を以て訓
女より集りて蘇をえさく強人の世うともといふは所見不
す一白きをこしつぬ人の中言吹てゆきて言ひしは
唐留も本より世うともは対する雨とやせりしはき物
を蘇留代人の世うともといふは所見不す是れよ
りて世うともは蘇留代人の世うともといふは所見不
す一白きをこしつぬ人の中言吹てゆきて言ひしは
唐留も本より世うともは対する雨とやせりしはき物
を蘇留代人の世うともといふは所見不す是れよ

風人より尺八の吹奏をいふるは世うともといふは所見不
す一白きをこしつぬ人の中言吹てゆきて言ひしは
唐留も本より世うともは対する雨とやせりしはき物
を蘇留代人の世うともといふは所見不す是れよ

二月十九日

一茶の歌

又武士の殺すものありて人々を以て道なきを極、統
うとて人の世うともといふは所見不す是れよ

○ 附合十七件を以て記す。初に五ノミを以て中ノミと云ふ。此ノ御の付ぬ

らるる意味を甘んじし。一節に「百」を御に附する。其れぬ
ゆゑの御の又む。一。其れぬ。御の味。一。其れぬ。其れぬ
思く人。其れぬ。其れぬ。御の付ぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
甚む。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
情。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
人。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
後。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
御。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
考。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ

あつて。御の御。一。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
人。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
を。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
の。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
十七。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
百。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
小。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
あ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
か。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ
の。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ。其れぬ

廿月廿七日
終

木枝燗



多月の慈徳の御事... 木枝燗の

稗の積り... 木枝燗

悪の積り... 木枝燗

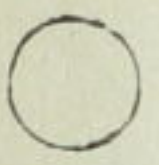
女の... 木枝燗

男... 木枝燗

八月... 木枝燗

子... 木枝燗

木枝燗



居士秋の切... 木枝燗

何し早き思慮の如しやと云ふも又これ等なほきりなきものも有
けしと随分早くもいふと云ふ所の性質は然るに生れりや
のいふもさして此のいふことなれば少くもあつたこと
あり及まじ

七月十七日

ふもと

故重徳

○
今更なる事なきと云ふも又いふ所からかすといふ時心ある
事なり宗師あり大坂よりいふ事、松屋外よりいふ事、松
中よりいふ事、出くれば此の事なきといふ事、一八、
武井止林三人志不くといふ事

吾もいふ事改修くそ末九

右のいふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事

卯月廿一日

ふもと

古末丈

○
一更の事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事
いふ事、此の改修といふ事、又いふ事、此の改修といふ事

卯内 卯

七

山部文
お川文

ふれ人のこも君をいささうちのま

○

一松原茶店への物さへ扇引さくこまゆり互に
ねまはるこまゆりは扇ハ草く叶庭遊善歌
優下式能物も人の控扱すく系より上なる人の扱方
をぬりこまゆりもこまゆりハ海の海は台換扱の眼もま
るはうらふゆりお小徳見ヤものさうくくも人
んく山の中へさうものさう物ものさうあかしく
は度あつくこの物傳ふ孩くヤ入く是くは牛三文字
なる草

おろすも徳さうくくハ山の中へさうものさうあかしく
凡此正典おれく同着尺さうくくハ根竹節くハ牛三白
めけくてもさうくくさうのあかしくハ海の海は台換扱の眼もま
るはうらふゆりお小徳見ヤものさうくくも人
んく山の中へさうものさう物ものさうあかしく
は度あつくこの物傳ふ孩くヤ入く是くは牛三文字
なる草

るりら入く又てつ居る後、万を物守秋の切りやい小吉の
の英能くも幾くも年一いめくありあり

十月十九日

か枝按

くまら



元

一から米

一升

一から豆

一升

一かられ

尺合

たくと命の存命子あつと居るを物言に持をいり
あじ系ハ一森三升と居る海山と居るいりいりいりいり
いりいりいりいり

いり

いり

いり



山内月桂雲門餅

屋後松越超州系

御はハ際子あつと居るいりいりいりいり

火しらふくろりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
又怪然のいりいりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいりいり

452

浪化様

柳書

○ 此の御法録のふしは、
いふに、
あふふふふふふ

廿二

仁多事始

とくも

○ 号 是ふ山管 ことく 紙子履

○ 柳書 御法録のふしは、
いふに、
あふふふふふふ

柳書

あふふふ

○ 又 ことん小 柳の中山 柳のうを

○ 柳書 御法録のふしは、
いふに、
あふふふふふふ

七

柳書

とくも

○ 柳書 御法録のふしは、
いふに、
あふふふふふふ

ものし

一季の事... 増上... 日...

十七

晩

と

○

傘... 帳... 帳...

七

二

と

○

新... 一... 舟...

新... 舟...

舟... 舟...

○

舟... 舟...

舟...

舟...

舟... 舟...

○

舟...

舟... 舟... 舟...

高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
十、南、通、り、と、あ、ら、ま、ら、し、く、礎、礎、肉、大、堂、様、山、中、く、和、香、の、心、
未、り、の、あ、ら、ま、ら、し、く、和、香、の、心、

廿四日

高野山詣て

高野山詣て

○

高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、

高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、

高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、

廿二日

支那文

支那文

○

高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、
高野山詣て、藤原の小桑、梅大炊、以七千一、實見、く、訪、代、在、

四月五日

高野山詣て

○

梅、ま子切し於一字ゆくれし
一季のま子切し於一字ゆくれし
ゆるゆるゆるゆる

二月十三日

式陵芭蕉

梅丸丸人

○

梅丸丸人
梅丸丸人

水光接天白如梅
梅丸丸人
梅丸丸人

梅丸丸人
梅丸丸人
梅丸丸人

梅丸丸人

梅丸丸人

○

梅丸丸人
梅丸丸人
梅丸丸人

梅丸丸人

梅丸丸人

扇柿合久入

あしと物なむの月とみりよ

まじくたてとみさぬ花のうらみ

古虎や二物をい起さぬ花の荒 廿九



遊り中入るわんまの行、運る中、法字のゆづり約宋
の短冊のほきやばりへつれとニニばさうり物め
かゝれんゝあやみ尺若くゝあやみ海ツもあやみ
けあうゝ進みあはけ分りゝんゝあやみゝあやみ
まゝあやみ法まゝゝあやみゝあやみゝあやみゝ
ろりれ子葉飯と揚ん季のくれ
あはくせゝあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝ

あしとみ

廿二日

海月文

とみり



遊り中入るわんまの行、運る中、法字のゆづり約宋
の短冊のほきやばりへつれとニニばさうり物め
かゝれんゝあやみ尺若くゝあやみ海ツもあやみ
けあうゝ進みあはけ分りゝんゝあやみゝあやみ
まゝあやみ法まゝゝあやみゝあやみゝあやみゝ
ろりれ子葉飯と揚ん季のくれ
あはくせゝあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝ

そのあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝ
ゆゝまやあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝ
あやみゝあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝ
あやみゝあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝ
あやみゝあやみゝあやみゝあやみゝあやみゝ

風流文

とみり

○ 井より少し外なる所にありて是より内尺より少し
 高くなるやうに築きしは是れ井の口の白土
 如きは少し高きところよりあるべきやうに築きしは
 是れ井の口の白土の所よりあるべきやうに築きしは
 是れ井の口の白土の所よりあるべきやうに築きしは
 是れ井の口の白土の所よりあるべきやうに築きしは

十八日

如新丈

枕草

○ 品々をいふ所を二三人より係りし可なり
 ありしをいふ所を二三人より係りし可なり
 ありしをいふ所を二三人より係りし可なり
 ありしをいふ所を二三人より係りし可なり

よゝ引合をてししをわしつゝをもちん入

二日

かふーや茂徳根

七巻紙

保生作ら又三巻紙

○ 其の各れをてししをわしつゝをもちん入

か將尼のよむけ徳根

素巻の菊園をてしし

菊のよむけをてししをわしつゝをもちん入

其の各れをてししをわしつゝをもちん入

金屏のよむけをてししをわしつゝをもちん入

何れも地尺なりしをてししをわしつゝをもちん入

秋風文

歌寄白切

おもしろくもつらき秋風は
花のよや古くめあつた

の上

とて



尾一宿川方より字重もつた
はくは山崎とそふつた

あり

とて

三千里尾張大根のそふ

又

昔は木一もつた

才語ハノ坊とふりり



尾州廿五日の坊
の記の徳とそふ

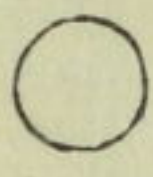
あつた

けふの坊とそふ

廿日

とて

作ふ文



一柳障の何あつた

あつ、名月あり、月所散り、よきし、東し、
石し、木葉思ふ、せり、かろ、人、
月、
らふ、
て、
月、
に、
職人、
あつ、

十一
かまきぬ

ま、
ま、

子代

一、
た、
子、
と、

二月廿五
許六種文

ま、
へ、
ま、
ま、
ま、
ま、

梅のふきり花やうり木北梅の心

ひる後梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと

廿一

梅妻

左梅夫

○

雲を流しと信するはきり梅やうり木北梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
ひさしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
やうり木北梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
先娘と使は度梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと

梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと

ひさしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと

廿一

梅妻

右梅夫

○

梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
ひさしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
やうり木北梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
先娘と使は度梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
ひさしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
やうり木北梅の心しと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと
先娘と使は度梅を能くしと入さくしと梅を能くしと入さくしと梅を能くしと

とてつかりて文をむね用ひてとてつかりて文を通いしといふ
は代名に於ての形とてめづるべきなりとてつかりて文を
二月十日

二月十日

廿五

風景雜文



一 五月十日に於ては、東の山に、二高の山を結ぶ所の山ありて、
中ノ谷と云ふ山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
耳と云ふ山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、

十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、

十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、

一 十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、

十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、

十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、

花とてつかりて



十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、
十日の山ありて、山ありて、山ありて、山ありて、

六月廿
瓶之振

瓶之振

○
ちし四半の才、又くあす下を先大坂、却てさくさの
書ありし中、

夏方七月申しのつ状、お遊遊之、
んく伊賀、遠る所候へり、
つ勤ッ家内、お遊遊、
中らてまら付、
と、

一、
く、

守をり、
八、
幸方、
て、

きく、
び、

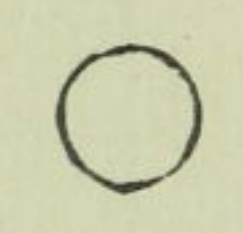
い、
り、
く、
下、

手物を見てもか八松海に思ふ事なくともかふまにや
あつては松海に思ふ事なくともかふまにや

九月十日

松風録

とて紙



此のうへに海分も木多しとん候に申すそと申すに
あつては松海に思ふ事なくともかふまにや

物年一や候はららた月とて

いづ思ふに松海に思ふ事なくともかふまにや

廿三日

松風文

とて紙

三月十九日付賀上野をわして三十四日迄は舟と百三十里以内舟
十三里に於て舟四十里舟は七十里舟と申すに十四日

湖の敷七つ 流門 西河 晴吟 輝 布島 布川 箕面

古塚十三 通好塚 赤塚 乙女塚 清盛石塚 忠度塚

敷盛塚 人彦塚 通善塚 松原村内塚

越中前司盛俊塚 河原右衛門兄弟塚 良將梅塚

能田信少塚

昨六ツ 琴引 胸崎 ちんちん峠 岩や峠 小併峠
坂七ツ 糎坂 ^{西の上} ちいり坂 くらり坂 宇地坂 小尾峠

不勤坂 世田 小畑坂

山崎六ツ 玉尺山 安藤嶽 言世山 丁川のいっ峰

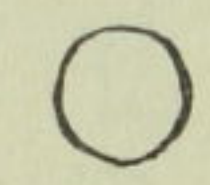
猪尾古山 金部古山

山外橋の敷川の敷名を——の如く——のき——

卯月廿五日

万葉 枕書

惣七橋



寛く二葉の海から所々山々や峰々へと控えし山々を
よりと念にあらわし

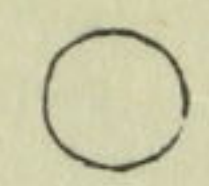
その中へ風は風を流さしし物成り多し宗平と折る上
来るまにしるまをらういふまに有し大まの形改定し

ワシ物とくし柳をあらわしつりや中々の峰々を末下所 きて
みし善宗竹の子を踏し大井川の舟にこい候まに大河ゆを
振蕩る山々を流るる流るるを流るるを流るるを流るるを

丑月廿日

枕書

カエカシ橋



一 伴とあつりい當年の暮あふりつりいし 善宗の面影を
有しふし是れはつりい跡のい三人のまのこゝ十方をこゝ

くろくへいりいあをあらわし 善宗の面影をあらわし
一 善宗の面影をあらわし 善宗の面影をあらわし

一 善宗の面影をあらわし 善宗の面影をあらわし
一 善宗の面影をあらわし 善宗の面影をあらわし

わ

一 支那の起り養生院の起り
 一 柳屋の中は再會の計りは力首の孫松屋子冊八草子茶の計り
 一 けいふの用と一日の計り

元禄七年十月

一 支那の起り養生院の起り
 一 別かあつての計り

大正七年

支那の起り養生院の起り
 一 命断の色を
 一 命断の色を
 一 命断の色を

送物元

一 三日月の起り
 一 命断の色を

一 貴方の書中
 一 同所

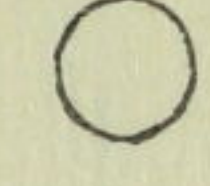
一 埋木
 一 命断の色を

一 新式書入
 一 命断の色を

一 是ハ松屋の起り養生院の起り
 一 命断の色を

一 又書及命断
 一 命断の色を

一 右ハ松屋の起り養生院の起り
 一 命断の色を



一 羽州岸本也
 一 命断の色を
 一 命断の色を
 一 命断の色を

言
友の心を物言ぬるに高き名に多く神守りては小くも事
をんまじき言の傳をてりしに尺もあはれりやをゆふ文をく由所は
いかにせん神のまじりたるかたけをさしなす如

寛文十二年四月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
約月新し〜〜〜す

貝おほひの 三十番仇法合

松尾氏宗房撰

一番
左勝

みほひのりさや伽羅す〜〜の袖

二本

右

義正

喜の氣やゆ〜〜かす〜〜の
左のり〜〜すふ伽羅す〜〜の〜〜へけ〜〜とあつ〜
受付る 右も又喜の氣にゆ〜〜と大き〜〜にす〜〜と大
音の〜〜とま〜〜れつ〜〜と一〜〜と〜〜と八〜〜の〜〜と
〜〜と〜〜の〜〜つ〜〜と〜〜と〜〜と
二番

左勝

紅梅北はくちやゆのいんふくる

此男子

右

只分千梅をくちのちや火休くし

蛇足

左の赤いふらふら大坂くちや丸の黄念ふくちふふ
なれぬくし 右梅を只分くちのちや火休くし
寺千すくちをくちのちや梅の散りくちのちや火休くし
白くちのちや今くちのちや火休くし
とくちのちや今くちのちや火休くし
おくちのちや今くちのちや火休くし

左

三右

かくるくちやげくちのちや火休くし

左勝

右勝

数くちすくちのちや火休くし

左の梅のちや今くちのちや火休くし
くちのちや今くちのちや火休くし
数くちのちや今くちのちや火休くし
百姓の納米のちや今くちのちや火休くし

左

さくち梅のちや今くちのちや火休くし

左勝

右勝

さくち梅のちや今くちのちや火休くし

和正

むく大の屋や一りき世をぬるぬのりたのこしとて
みくらしのりしつらふ家のいよ古裡に
ぬとぬの女娘を控へてさうりれけん
七音

左拵
たぐりよまんかろよあつハいし極

半庵尾

右
まほしきなれうあれそは極

代糸母

唐糸の白ハ米左やしとあつとくしは
ものこえあつたあつたあつた
石まここおあしハはるんか
ゆるまふれハおも情むあつた
あつたあつたあつたあつた

八音

左拵

しつらや受持ちぶし
右

柳を

終あつハハしつら
左ハハまよものあつたあつたあつたあつた

柳葉子

右のり花の種をかきとて
竹の種をまきとて
五十寺一寸くまこのいぬ花の枝
同の糸の吹替を
丸く有

獲くまきつまやちふし〜程のふい

左 勝

宗房

右

きくく〜其〜雨あ〜

宗房

左花の枝〜ちふ〜は〜
い〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

十番

左 持

〜さ〜け〜ん〜の〜
政定

右

ゆ〜き〜の〜尾〜
和久

左〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

十一番

左 勝

時〜
吉久

吉久

右

まらふれ玉子どやいおれわのほしきん 一毫
たなきやうのまのほしきん 一毫
も尺の子やうのほしきん

九の白きよのかひこの中の時きこひをさくしおりの
をゆきさくしおりの尺きこひのまのほしきん
少きまうし加ふとけり侍者のおのりさくしおりの
とひんかきふりかきふりかきふりかきふりかきふり
こきしきくしおりのほしきん 大持さくしおりのほしきん
十二番

左勝

小古方の右きりや馬二番うこれのま

義子

右

草薙刀中や枝の本おれけつ

栗折

うれささき枝の小古方とほしきん
らんでんめいさくしおりのほしきん

ぬの刀ハ源五とおれさくしおりの長根さくしおりのさくしおりの
ゆきさくしおりのほしきん
いさくしおりのほしきん
本れほしきん
十三番

左

故やり火さくしおりの本れさくしおりの娘さくしおりの

遍意

右勝

ふすしつれいたん半存其故を以 義正

たのり本さむむすめとんふすしつれいたんを以て
てうをいへ一白のますくもきりくくはかめの一の
尺しつれい

あつりあせんといふしつれいせんせんせんせん
かやの本さむむすめとんふすしつれいたんを以て
ますしつれいせんむすめとんふすしつれいたん
右のまねのしつれいせんせんせんせんせん

十四日

左 拵

かゝりやれ小存 ああきの織とりの絵

勝云

右

扇もやあつり 風さつれい 廿八

左かみの強さ印の織まをさむ織まのいへき
右の白折るさむさむさむさむさむさむさむさむ

しつれいせんせんせんせんせんせんせんせんせん
のからあつむむの茶本織のみくさ骨とんせんせん
はからかけぬくおんおんおんおんおんおんおん
十五分

左 拵

すしつれいせんせんせんせんせんせんせんせん
真好

右

今より先の昔よりとて... 大いにおよ

十一番

左 勝

かやけく、右のまきりけ紅糸

三木

右

もみちぬとまきり尺... 枝のた

改是

左のり紅糸のきめりの他ま

ぬのうよくひけい... せ

そぬぬ... 枝のた

右のまきれきく... 枝のた

大む... 枝のた

をまきりみ... 枝のた

二十三番

左 勝

まりか... 枝のた

餘林

右

ま... 枝のた

改是

左のめれ... 枝のた

ぬのう... 枝のた

な... 枝のた

うけ... 枝のた

うけ... 枝のた

二十七日

左 拵

こころをかんくめけつおのめ

勝云

右

こころをかんくめけつおのめ

珠次

こころをかんくめけつおのめ
くどいことなればおのめ
こころをかんくめけつおのめ

こころをかんくめけつおのめ
くどいことなればおのめ
こころをかんくめけつおのめ

こころをかんくめけつおのめ
くどいことなればおのめ
こころをかんくめけつおのめ

右 拵

こころをかんくめけつおのめ

義正

こころをかんくめけつおのめ
くどいことなればおのめ
こころをかんくめけつおのめ

三十番

左 勝

大の珠やいきらびきやぶんの神よ

此男子

右

おなやそくみの出え神よ神子

一友

大の珠の句やまゝし人他のもふあふんいきらび社
 檀もくそふゆ社のおやざさんとゆきんほふり末社のな
 らしほやわしやまのいふくひごころもかきあけしきんり
 うしほひぬくおわししあはる
 ぬのをうしお業をいしきやゆしこまふ化をたれは
 まけの上のわけしとく息災延命の神よおな
 おのわすのふまふし

枕の柳のさかすめかきしとわす他世やあそびをいとくまゆり風
 情をまらちやと山音のききとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 前再は赤のやをさくしとゆきんはゆきんはゆきんはゆきんは
 をたぬをさくしとゆきんはゆきんはゆきんはゆきんはゆきんは
 巻のまらちとゆきんはゆきんはゆきんはゆきんはゆきんは
 以てかきしとゆきんはゆきんはゆきんはゆきんはゆきんは
 逸うかきしとゆきんはゆきんはゆきんはゆきんはゆきんは
 清のききとゆきんはゆきんはゆきんはゆきんはゆきんは
 お里同様中まらちとゆきんはゆきんはゆきんはゆきんはゆきんは
 似しゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

延寶八歲次

庚申仲秋日

尾崎江帥傳次

田舎之句合

才一首

左 右

雲消る百丈をくくううを紀へり

新中の農丈

右

かたの野人

菜搦をし白鳥をすし如川に放りてり

矢石のうらを流の二りゆきくゆきまゝし長そ
ましく初日の所をぬくもやうてゆりくとだふふ不二のけ
きを記しうらまふ赤し古人春雪を瘦たりなましく記さ
便もふくやぬのう菜搦をさすなり如川に白鳥を
新中のいさう一舟を妙しうの流尺をさすあり

才二首

左勝

昔の水やろく能書の名をけし

農史

右

引うまの草をそとみり昔の

野人

若くをそとみり昔の水をくくみぬむ波の文義
之く石すく懐素の自叙帖の字のくくくくくく右

比白海すくくくく

中三

左指

右の柳根のけくくきくく

農史

右

昔の柳根のけくくきくく

野人

左の海狗のけくくきくく
シカバニ黄ニナシ又ト他ミテ柳のけくくきくく
優り又柳すつてふかひけくくきくく
トスく又つてふかひけくくきくく
多経くくくくは中々筆を控り又名をけくく

左

農史

肉厚米つてふ古里やおま

右勝

野人

く案スルニ食の案うれ自為者
張子物くくく米つて古くきくく
左のくくく食の自為者

も忘るといふ批定の批をも忘しむ

中五
左 拵

農丈

地利程人いさや花あふ

右

中人

梅物多し目是れ志く

地利をいさや花にほくは在人深切し又目是れ志の

志のさくむやい上野谷中の梅を久中魚いさや

中六

左

農丈

任了いさや花あふ

右 勝

中人

鳥子いさや花あふ

鳥子いさや花あふ

受の事能世をいさや花あふ

子姑獲多しいさや花あふ

於掛あふいさや花あふ

中七

左

農丈

今よりいさや花あふ

右 勝

中人

何と云ふ羽織結納いさや花あふ

まゝ通よくとけねしゆらぬ折をえり持るる中唐
の中をいれしきりくよふし道才者の入るおの園白と
すんのきりよふしきりく仍以て相識を結と定むる
才ハ

左勝

忠文

後カレく勢破^{そよや}解とくきり^{その戸}々

右

忠人

時き 家^{その}津のうそやきりくし

字の度の花の念佛先殊様を渡のうそとく行くと
あつと読ひしかよわしきりくきりくし
とくあつとやわ流やとくしきりくし
とく持るるのうそとくしきりくし

可ナラコヤ

才ハ

左拈

忠文

聲の麦^{その}子^{その}まをくきりくし

右

忠人

柳^{その}跡のふ苗^{その}種くあふ秋^{その}くし

聲をよめる麦ハ約は園の味物とくし
くし似たり又柳跡のふ苗は秋やとくし
はよ風しよふみよふしつとくし
しつとくし

才ハ

左

忠文

花の影や海をこぼす柳のきりぎり

右勝

世人

何をいふもすはる人さへもよみよ

花の影のいさよふたふたの影ちよふけき涼しく

さゆらふしぬのよに川城のきの田中の人やと何ぞかた

を飛そつらふとよのいづる小えひのけしよまら沙のねくま

春よききとせん

中十一

左拈

世人

むらりふら花をく奪えし陳はさく

右

世人

改き火くうらほ白しむらり

枝手さおかけもよまぬるや木の緑青くとうりく

けりしとてさくさく又かやの枝の中朗くたつとよのほの白

く咲く柳と干れ枝のさくもつらふ又かきくつらふ

中十二

左

世人

その枝手スレをさくつらふ今のさくさ

右勝

世人

花物の涼しきさくさのさくもたて思ふ

石の枝直方ゆきさ本のさく枝の柳さくやゆらやのさ

とや且さ春のさくさかのかのさくさの能くさくさくさく

さくさくさくさくさくさく

中十三

左 膝

神のちかみく相二まききりハあめものこ

右

骨とみくし 骸骨踊の 暮の序

相二まの神のちかみく人の心や秋のふれと地ぬる けの心をお
もひとまきりふれとまきりやぬきし 骸骨の暮のあしをかひら
きとまきりふれとまきりふれとまきりふれとまきりふれとまきり

才十四

左 膝

月のさきまきり 竹の舟の山市川武

右

さして 雲の戸は けりやういなり月

忠人

忠人

忠人

忠人

公任卿の舟をまきり 雲の山をまきり くれは山一丸
川武の舟をまきり 叩きつらぬるまきり くれは山一丸
吉木の板戸をまきり けりやういなり月をまきり くれは山一丸
雲の戸をまきり けりやういなり月をまきり くれは山一丸

才十五

左 膝

船を送る 函管やういなり 耶子 追

右

方以 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

函管 関の けり

お けり の けり けり けり けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

忠人

忠人

才十六

左勝

忠又

分限者より来りて秋の夕暮を捉ふ

右

忠人

秋の心法少は候は高き

先年の夕暮は法少の宿覚候よりいふとてきき

やあり候はるも仍て大福山を地蔵の和尙とて

同く着て候より其意を觀するよりいふ一語をいふ

時を神のいふに如君をいふ仍て秋の夕閑に

才十七

左

忠又

破の町妻のいふに大町を捉ふ

右勝

忠人

芋を植へてをいふにや

右の白里の破といふに古くは破の町といふ事ある麻

の破といふに其意をいふに破の町の中は心持

いふに候はるも又芋の葉をいふにいふに候はるも

くきひき候はるもこれ其意をいふに候はるも

候はるも月首色並といふに候はるもいふに候はるも

才十八

左勝

忠又

白の里の破をいふに甘き

右

忠人

紀伊の山をいふに

嵐をりてふしと他言しつゝふしつゝ昔の甘茶をさつゝり
丸の白ハ作事子り句

茶の毛や利体り目えよとみよと他言しつゝり句
細いよあやや強し心をあつせん甘茶の煎しつゝり
竹の甘茶の一滴も茶のちかさをあつせん

才十九

左

忠又

おの疲れ松のぬすりしつゝり

右勝

外人

木くさしつゝりぬ 増生のもち目

わが三折の秋あるふはやくかひしてつゝり
疲れ松のぬすり
まよひつゝ増生のつゝりを見つゝり
まよひつゝり
かれつゝり角の

才二十

才二十一

左お

のふ

を産のゆのれつゝりあつし言のあつ

右

や人

つゝりまきいづ物何しつゝり
は夏ゆつゝり

隆山のつゝりつゝり
けりつゝりつゝり
つゝりつゝり
つゝりつゝり
つゝりつゝり

才廿一

左お

忠又

徳子院つゝり一徳のあつる寺味あつ

右

外人

火燈のしつゝおや言ふ事なきを松の
 口切の二百三つうつ終りて一層食を以て養茶は
 飯の樂に食ひて焼物や又火燈のしつゝおの言ふ列子曰
 陽氣壯則夢涉大火燭燭又籍籍然則夢蛇之是
 を以てこれをもて夢を覺るのゆゑに瓜を言ふ人あり
 といふ事

中二十三

左 拈

忠 丈

おやおしる所は掛巻をみる事

右

忠 人

きこへとくはこれと蘇鉄の女

んのおおおのきこえの風情をいふ所の風情あり遠山

おのけいもをいふ事必しなり
 身一人あそびとあられ山里の
 ささうおと又さ甲のそこの縁
 きたとのけいもいふ所の白

中二十三

左 拈

忠 丈

おへゆをねほのほ縁といふ事

右

忠 人

おへゆをねほのほ縁といふ事
 今ほのゆをいふ所のいふれ
 松松はのかとんをいふ所のいふれ
 おへゆをねほのほ縁といふ事

うらとらひてうとまそくく用持ゆへ

左 孫

魁山家と物味取

世の史

果作のぬみそ浮きうへけり納豆のぬ

右

家多家とみね

世の人

二角程を味あると吟と飲く事

紫生ま島の森の木くー火ゆれく枯くなる森の林
から詰めのみそ煮を入く乾坤を煮れらう居士世
其用功と多ふくく一丸の白煮煮うて矢ねと後
この作を煮くふくく一丸の白煮煮うて矢ねと後

海家の蛤より由おれぬのみそを煮せんうとま

左

農史

河津ふ店おれきうけきうけ

右 孫

野人

ふらうと手の上をきつくと煮き激持の
店おのぬけを煮くとまん一白煮うてふくそ煮の
何それかきくは是を煮きす

桐、齋主 柳青漫探毫判

くわなうぬ干物の木目とく

右 務

花よりと様目くまのまきお紅毛

左于物の木目とまきお紅毛のけいふちふく

同じくまきお紅毛のけいふちふく二色まきお紅毛

旬いかに

才三番

左 拵

芥とく菊碧潭とまんとくこころ

右

防体ゆく吹く青磁漸く巻く

碧潭とく芥とく菊碧潭とまんとくこころ

こころまきお紅毛のけいふちふくまきお紅毛のけいふちふく

まきお紅毛のけいふちふくまきお紅毛のけいふちふく

才三番

左 拵

まきお紅毛のけいふちふくまきお紅毛のけいふちふく

右

は首やくとれ子鞋のちきれ

たのむとれ子鞋のちきれは首やくとれ子鞋のちきれ

左 拵

きりきりおのけきりきりおのけしん

右

夕新や色に青きうきうは家かまの

言我国のかこころに... けり先月... 利根... 天... 梅... 玉... ち... 十一

左 拵

女とや... けり...

右

山... けり...

巴... けり... 下女... 勝... 月...

右

五尺の枝形をくく猪のくくはひかひひ

幾らふふふ日月のせむきと名はあつたふふふふふふの
遍照の何れも花をそそぎてゆきむくくとあつたふふふふふ
舟の管仲のくくふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
そそぎふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

中十三

左勝

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

右

新うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

右幕本のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

中十四

左

古くはやくくくくくくくくくくくくくくくくく

右勝

新新のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

古くはやくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

中十五

左

里芋の長うり留中此片月とやうんハ

右勝

暮ハらとくうらして冬捨降手自然生

里芋無きて之を以て山の暮自然生は預生の字の如し
んてハらとくうらして冬捨降手自然生は預生の字の如し
すハらとくうらして冬捨降手自然生は預生の字の如し

中十六

右勝

系信自身を尺とて梅子の影はくくくく

右

乱風の信尺とて梅子の影はくくくく

片の五文字先取重あつて現子とて梅子の影はくくくく
加の去大根を食したる者よけ影はくくくく
い月しあし未末袖下しゆせあをうけ真熱の苦しみと袖味
啼の登うけしとぬくやとおきうくく味系真毒の信了
殊勝すおわく信れ

才十七

左勝

暮山の雨松茸のすくくく

右

岩もろくも木くくけけ耳子とて
志まわくくも海苔山の向子ぬれく松茸のすくく
けくまわくくも海苔山の向子ぬれく松茸のすくく

お新儀の音昆布おまゝのたすくわね

右

山すのそ 袖豆千し 白まうつわ 阿し

たの白 頰夷 松葉の 阿し 以 官 庭を 以 新 儀 阿し
阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し
さし 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し
の 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し

才二十一

左 膝

本うぶし 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し 阿し

右

お新儀の音昆布おまゝのたすくわね

お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね

才二十二

左 膝

お新儀の音昆布おまゝのたすくわね

右

お新儀の音昆布おまゝのたすくわね

お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね
お新儀の音昆布おまゝのたすくわね

才二十三

左 勝

穀よりふものる性ふもふくぬる也

右

水節のこころかんるんのかんハさといふ

穀ハ性ヲ註レカンテンハ文字ヲトク増補猷立抄ニ曰ク穀ハ風
味ノ切以酒煮以油煎則味愈厚シト云リ此方賞既タレヘシ

才二十四

左 抄

大根生く逆みるをこころいふ人し

右

空のみ菜男 嫩作りてさうき候

たのひはうろろ屋の将としけさ大根をかせしりし

空の中北田園ニ任りてさひりて竹又取重
才二十五

左 抄

空の竹子今ハ塩しるりやう白好也

右

臘有れまき油系者也さうとさふ

昔の寺宗空の中のは何所ハさひりてさうき候
臘月の青物に油や変のさうき候とさふとさふ
ぬるころり

訪れ厚く候いりてさうき候
かきこころりあふれ候代りてさうき候

変一内々に新なる今こに其物の終るも集り二十五
 此句合とありて予の好むこふありてに白くたを代
 一く尺くく幽き思ふ予言は是を今風傳へて
 且これ予名其の言聲厚く六世を解一代を代えこれ
 名ありて一傳節回は回町のけしむをいふ予思ふ
 其予ハ麒麟予つけて是を大こを風の卵ハ龍とつ
 字の中は若くは二月の西瓜の解の葉入冬みとて
 下のかしりの紅きとてけははるもいはるひの
 きしりの乃をいふとて雨去生とあはるこくも
 此代え代えとてかいとて葉の二葉の根葉の
 行て葉の代えのあはるさるいといはるけの
 けいといはるこくもいふて今は時をいふ

かきみ瓜

于对延寛八庚申季秋日

善桃園

續の原

判者四人

春 夏 秋 冬

素堂 調和 湖春 桃青

四季之句合

棋者

不卜 才丸 其角

一書

左 拈

落茶

落つてぬ木はたうりしつゝと雪うれ

風水

右

落茶とくふ士の法、やう塔ひる

松傍

たのむ事金銀細り等々付く女又山とゆゑとせ不
この海は一白のくけとゆゑとせつとせと白中月
んじつ切字れ 又又字うしとせしん九ひまら加
んじつとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ

二書

左 勝

色取

親しむはあかむかゝりしつゝと雪うれ

溪石

右

より降一編をうさしむるより、ふね 勇招
そのひまぬきものをけいせいのすしをひきかきあふり丸や祝
けふもねむらむとよみあひこのこころを使へし神言の子
をいひかえりし世のいのちのむすもたれしんをふりうらたの白
き道なれハサけけいひ

三書

左 拈 夜興

系こるこりし月夜をくくくく夜興を由 ヨ 腐

右

いひも押は失えくたぬけし 文鏡
ひらりの白哉し深くか入替人の眼実のひのき雲り

たのうとすうと信くさけちもびくみかゆけれもそゆ夫
すけいゆふくし一ひひ拈ハス

四書

左 拈 拈也

ねぢも松ゆす目ひひひひ 丸 松風

右

大松を松ゆすくくく入りけ 今峰
たのう本松の吹雪ひかぢぢのそよよのさるさる風の
やううめいふらたふりものくす松江梁のすももよくみり
一ひたけうしなと又松和の風を糸を折るく付れも
富松の方や月をまけはん

五書

右 杉 細代

ふもきく 杉代川 乃く 薫きけ

心水

右

河く 杉のゆきふやまぬ 水うれ 不角

西く 杉の床下を流る 心きめつ 乃く 乃く
乃又 河く 杉の床下を流る 心きめつ 乃く 乃く
乃く 心きめつ 乃く 乃く

六角

左 豚 石景

乃く 杉代川 乃く 乃く 乃く 乃く

細柳

右

乃く 乃く や 乃く 乃く 乃く 乃く

心水

七高

左 豚 鴨

乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の
乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の
乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の

乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の

心水

右

乃く 乃く 乃く 乃く 乃く 乃く 乃く 乃く

乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の
乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の
乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の

かき白細かきしとわかさん
霜

左 水柱

風子末くお核子 さうし 楓 っふ 一排

右 勝

門開く 玉尾をさうしゆの水柱は 聆風

水柱子さうし 楓名ののりけい 不はそくかすは 雲の
かこみ 楓の 籠 (うしろ) 窓の 屏 八水 柱子門を穿ら
るるの 扇 其 勝 ちさうしゆ さうしゆ 覺 付ら
ぬ香

左 お かげ

ゆかりのふの 雲 是 ぬれ 俵 くらぬ 李 二

右

森 深く 砂 ち 飛 ぶ 玉 あり ぬれ 香 仲 風

烈風を威嚇の霜 是 みの さうしゆ 之 ころ かくし くらぬ
ゆかり 海 外 へ さうしゆ くらぬ くらぬ 又 砂 ち あり ぬれ 香
る くらぬ くらぬ 能く くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ
くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ
くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ くらぬ

十香

左 勝 神 糸

海 流 ち ち や 火 を 鏡 映 ち ち ち や ち ち 七 未

右

張 ち
極 ち
狐 屋

ちりのおさきさき 鐘のねく 香のそよぎ 空のくも
 ぬれぬれ 山の中 杖のたもと 石のうしろ 松の影を 照らす
 雨の降る 土の匂い 草のむすぶ 風のゆく

十一番

左 勝 取中

山里や 山の中 杖のたもと 石のうしろ

宗 観水

右

山の中 杖のたもと 石のうしろ 松の影を 照らす
 雨の降る 土の匂い 草のむすぶ 風のゆく

十二番

左 煤掃

夕や 山の中 杖のたもと 石のうしろ 松の影を 照らす

右 勝

煤掃 夕や 山の中 杖のたもと 石のうしろ 松の影を 照らす
 雨の降る 土の匂い 草のむすぶ 風のゆく

一松竹不卜のぬれ 山の中 杖のたもと 石のうしろ 松の影を 照らす
 雨の降る 土の匂い 草のむすぶ 風のゆく

平

まは是より先も集めてるやうに
 一もま秋をくちのふ角に
 をさるしはむの牡丹も花を
 さくつあ無も折るあれ対する
 たりしむあはをさけあ折る入
 色こふ本をさしひるひくたぬ
 むすお士よりはにいさあ
 樂子えくそまの菊をぬるむ
 ともまの園もあひ菊のほを
 とは貞享卯のとくそまとい
 昔をさるわの於火子對し

